「遊び」雑感　その四

人形の果たす役わり

吉村　真理子

子どもと人形の関わり

店頭に雛人形が飾られると、遠い昔の自分の人形を思い出し心の奥に暖かい灯がともったような気分になる。お雛さまに限らず、子どもは人形に対して他の玩具とは異なった感情を抱いてきたのではなかろうか。昔から女児は人形で遊ぶものと思っていたのに、私がまだ保育現場にいた頃、当時の子どもたちの人形に対する関心が薄くなってきたように思えて、仲間の保育者たちと話し合ったことがあった。三歳児はまだ人形を自分の子どもの

ように抱いたりおぶったり寝かせたりして遊ぶ姿が見られたが、四、五歳児になるといわゆる「人形遊び」はほとんど姿を消し、他の遊びの道具として用いられるようになっていた。空き箱でトラックや船などを作ったときの乗客として詰め込んだり、男児はゴム鉄砲の標的にして倒すなど人形への愛情が感じられない様子に、これも成長の過程かと思いながらもみんな心を痛めていた。

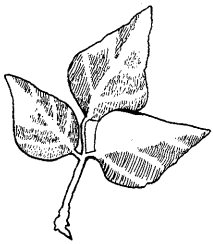
ところが、雛祭りが近づきそれぞれのクラスで自分たちの「おひなさま」を作りはじめると、意外なことに年長組の男児も紙粘土や化粧品の空きビン、布や千代紙などで工夫しながら熱心に一対の内裏びな作りに取り組み、出来上がると満足げに目を細めて棚の上に飾っている。年少児が見にくると「さわっちゃだめだよ、見るだけだよ」などとやさしく注意している様子が微笑ましい。母親が迎えに来ると手を引っ張るようにして雛だんの前に連れて行き「これがぼくのつくったおひなさまだよ」と得意そうに報告している。家に持って帰るときも壊れないようにティッシュペーパーにくるんで箱に入れる気の使いようだ。とてもゴム鉄砲で人形をねらい打ちしていた子どもとは思えない豹変ぶりである。

にもかかわらず、その後も保育室の床に人形が落ちていてもだれも気にせず、片付けるときも足や手を持っておもちゃ箱に放り投げる姿を見たときに「このままでいいのだろうか」「人形の与え方をなんとか工夫してみよう」と勉強会を持つことにした。

勉強会の過程

人形によって子どもの関わり方が異なったのは、一つは自分が作る過程で分身のような親密感が育ったものと既製のものの違いであろう。もう一つはその年齢の子どもたちの興味関心と遊びの種類を把握し、それに対応できる人形を用意していなかったのではという反省があった。

そこで、先ずは各年齢のクラスごとに人形の種類と関わり方を観察してみようということになり、今まで気にもとめなかった人形との関わり方に視点をしぼってメモを取ってみると、次々と興味深い意見があったので、その一部を紹介してみよう。



☆三歳未満児の関わり

○歳クラスでは大人が持ってあやす場合は、人間の形であろうと熊やウサギのぬいぐるみと全く反応は同じであること。これらの共通点は目と口のついた顔があることで、ガラガラや風船などとは違い、じっと見つめる時間が多かったような気がするという。目と口があることで人間の顔との類似点に気づいていたのだろうか。一歳近くなると片手で握れる大きさで感触のよいものが好まれ、何でも口に持っていくので洗濯しやすいおぼろタオルのぬいぐるみが最適という結論になった。

やがて、立って歩けるようになると人形を「おんぶおんぶ」と言って持ってくる。紐で

背負わせてやるとうれしそうに歩きまわり、すぐに「とって」と降ろさせ、また「おんぶ」を繰り返す。背中に違和感があるのか降ろしたいのに、すぐ「おんぶ」をしたがるのは、自分がお母さんのつもりで人形をあかちゃんに見立てて得意な気分を味わっているのかもしれない。この時期は抱きしめたりおんぶするのにちょうど良い大きさと柔らかさが求められる。また、この頃は等身大の人形やあまりリアルにできている人形を恐がり、誰かが持って近づくと泣き出すこともあった。

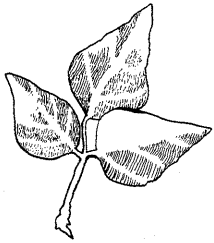
二歳になると遊びに意図のようなものが見え始める。小さなかごを見つけると「おかいものいくの」と人形を背負って行く、ふとんに寝かせてとんとんたたく、積み木を人形の口にもっていき「さあミルクですよ」と飲ませるまねをしたりする。自分が母親にしてもらったことを、立場を替えて人形に対して行う「つもり遊び」である。

☆三歳以上児の関わり

三歳になるとままごとの中に人形が加わり、数人でいわゆる「おうちごっこ」が始まる。むろん人形の役割はあかちゃんで家族としてあつかわれる。二歳児がひとり遊びであったのに比べて三歳児のそれは必ずといっていいほど二～四人くらいのグループで遊んでいる。社会性の育ちであり、それを支えているのは言葉の発達であろう。

言葉を自在にあやつれるようになるとお互いのコミュニケーションがスムーズになり、お母さん役を名乗り出た子どもの指示にしたがってグループで行動できるようになる。

「おべんと持ってお花見にいきましょう」と言えば、みんなはそこらにあるおはじきやお手玉などを手提げ袋に入れ「これ、おにぎり」「たまごのサンドイッチだよ」「バナナも持っていこう」などと楽しそうにおしゃべりを始める。だれかが「バスでいこう」というと早速椅子を運んできて並べ、みんなで乗り込む。お母さん役の子どもは忘れずにあかちゃん（人形）を乳母車に乗せて押して歩く。



これらの遊びは言葉によって喚起されたイメージを共有することでなりたっており、イメージのもとになっているのは各児が最近経験した家族での「お花見」であろう。「お花見」「お弁当」という言葉に、過去の楽しかった行楽の場面を思いだし、その喜びを再現するために手近にあるものを本物に見立てて遊ぶ。これが「ごっこ遊び」である。共通の体験があれば言葉足らずでもイメージが描きやすいので、三歳児の「ごっこ遊び」は日常だれでも体験している食事、買い物、お出掛け（公園、動物園、遊園地）、乗り物（バス、電車）、お祭りなどがほとんどである。

もう一つ、主として男児に多いのはテレビアニメのヒーローごっこである。人気アニメはみんなが見ておりストーリーや役割もわかっているので言葉による説明がなくてもイメージを共有できることと、せりふも単純で「やっつけろ」「エイッ」「ヤー」「トーッ」などの単純な叫びでこと足りるせいかもしれない。この頃にはプラスティックの小さな〇

○マン人形の収集に夢中になる子もいる。時には怪獣になって積み木の家を打ち壊し人形たちを容赦なく蹴散らす神がかり的な表情は気になるものの、力や強さにあこがれるこの年齢なりの表現かもしれない。四歳くらいまで続く子もいるが、一過性のものと保育者たちは見ている。

四、五歳になると、日常出会う周りの社会をよく観察していてそれぞれの職業になりきって遊ぶお店ごっこ（最近はスーパー）、病院ごっこ、美容院ごっこ、郵便局ごっこ、幼稚園（保育園）ごっこなどがよく見られる。

ごっこ遊びの意味を考える

こうして人形と関わる遊びを見ていくと、さまざまなごっこ遊びが浮上してきた。人形は二、三歳前期頃まではごっこ遊びに欠かせない物（ただし人間にとても近い存在）として遊びの仲間になり展開を助けている。生きた子ども同士では相手が思うようにならないので、その前段階として人形相手に他者といっしょに遊びを共有する練習期間とも考えられる。人形は愛情の対象となり「この子となにをして遊ぼうか」と思い巡らすことが筋書きになり遊びが続いていく。言わば複数の人形相手のひとり遊びとも言える。

やがて親しい友達ができると、ごっこ遊びはみんなの知恵と体験を出し合ってよりおもしろくなっていく。ひとりではとても思いつかないストーリーが次々に出され、やって

みたい楽しそうなことやとてもできそうにもない冒険も、自分ではなく人形が代わりにやってくれるのだからと安心していられるし、時には「そんなことしちゃだめよ」と人形をたしなめることもある。ちょうど『どろんこハリー』(ジーン・ジオン文　マーガレット・ブロイ・グレアム絵　渡辺茂男訳・福音館）の絵本の中で、子犬のハリーが子どもたちの願望を代行して思いっきりどろんこになって遊んでも、家に入れてもらうには清潔でなければならないことを納得するのに似ている。

こうして自分たちの作った筋書きでありながら人形の行動を客観的に眺めて是非を判断する経験を経て、今度は子ども同士が直接関わるごっこ遊びの段階に移行していく。人形は脇役となり、先に上げた乗り物の乗客や病院の患者のように、ストーリーに影響をもたないエキストラの役を担うようになる。

冒頭に上げたひな人形の例は製作する喜びと、作品への鑑賞も含めた満足感と思われる。しかし、もっとも大きいのは手作り作品への愛着だったのではなかろうか。

ある試み

そこで年長組を対象に一つの試みとして、職員たちが手作りの人形を与えてみることにした。常時子どもの目に触れるよう製作途中の人形をかごに入れ棚の上に置いておくと、

早速寄ってきて「ねえ、何作ってるの」「あ、わかった、お人形だ」「え、こんなにして綿を入れるの」「毛糸の髪の毛だ」と興味津々の様子。毎日登園するとどこまでできているかを楽しみにするようになった。ボディが出来上がり目鼻を刺しゅうすると「かわいい、なんて名前にするの？」「だれのお人形？」と質問攻め。「先生のうちの子どもだけど今度このクラスに入園するからよろしくね」と頼むと「いいよ、お椅子も机もつくらなきゃ」と大張り切り。なぜかアヤちゃんと名前がつけられみんなのアイドルになった。

空き箱で机、椅子、ベッドを作る子や、指編みでマフラーを編んでくれる子、お昼になるとままごとの食器を忘れずに並べてくれる子もいて久しぶりの人形ごっこが年長組に復活し、今まであった人形も仲間に入れて遊ぶようになった。ここで気づいたのは手作り作品のインパクトで、一つのものが出来上がっていく過程を目にすると、自分もその創造に関わっているような期待と愛情が育つこと、子どもにも遊びの中に創る余地を入れること、人形との出会わせ方の演出の大切さであった。

人形遊びのなかでこまやかな思いやりを発揮する機会があると、他の場面でも人や物に対する優しさが育つような気がする。雛祭りの時期に人形遊びを見直してみてはどうだろうか。

（元松山東雲短期大学）